

2020年9月13日(日)  
福山バプテスト教会主日家庭礼拝の手引き

## 1 礼拝の進め方

礼拝プログラムは次のとおりです。このプログラムに沿って、賛美を献げ、祈り、聖書を読みましょう。宣教の部分は説教を読みましょう。

## 2 礼拝プログラム

聖書1 旧約聖書 創世記22章1～8節

賛美 新生59 父の神よ 汝がまこと

(または) 新生301 いかなる恵みぞ

個々の祈り \*自由にお祈りを献げましょう

主の祈り

聖書2 旧約聖書 創世記22章9～18節

宣教 「主の山に備えあり」

献げもの 新生658 このささげものを(B) 又は 新生51 かみさまありがとう

\*賛美の後に、感謝の献げものとお祈りを献げましょう

賛美 新生讃美歌 674 父 み子 聖霊の

黙 禱

## 3 説教「主の山に備えあり」

今日のテーマは、「主の山に備えあり」です。主、神様の山に、何が備えられているのでしょうか？ 献げものです。今日は献げものについてのお話しです。

■残酷な命令 22章の2節をご覧ください。

22:2 神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」

聖書のこの言葉を読んで驚かれた方、強い疑問や言いようのない思いを抱かれた方が多いと思います。聖書を神様の言葉として心から信じる者でさえ、このみ言葉を読むときは穏やかならぬ思いが行き来するのを感じます。仕方がありません。これも聖書です。残酷な

場面は、この箇所以降も何度か登場して参ります。み言葉は現実を隠したり、美化したりということをしていないのです。

今日の箇所の問題は、そんな要求を神様がなさった、というところにあります。「もし、自分がアブラハムの立場だったらどうしよう」と誰でも思いますね。あなたの息子、娘を献げなさい？いくら神様の命令が最優先だからと言って、どんなものよりも神様の方が大切だからと言ったって、それは間違っているんじゃないの？そんな命令、聞いちゃいけない、聞く必要なんかない！…ええ、聞く必要はありません。聞いてはなりません、私達は。聖書の神、真の神様がそんな要求をされることは絶対がないからです。もし仮にそのような声が聞こえてきたとします。神ではありません。それはサタン、悪魔の声に間違いありません。それならば、どうしてアブラハムにはそんな命令をなさったのか？

■築き上げられた信頼関係 アブラハムが、最初に神様の声を聞いたのは、彼が75歳の時でありました。

12:1 …あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。

12章1節のこのみ言葉を聞いて、彼は旅に出ます。み言葉と共に歩む旅です。旅は生涯続きました。神様の奇跡によってイサクが生まれたのが100歳の時。今日の22章にまで来ますと、そのイサクも成長して、少なくとも10代にはなっていると思われます。仮に10歳だとすればアブラハムはこの時110歳。最初の旅立ちから実に35年の歳月が過ぎていくわけですが、見ることのできない、しかし真の神様が生きておられる。その神様に対する信頼という、当時の人間達の中では奇跡としかいいようのない賜物を持って旅に出たアブラハムでしたが、しかし彼も、その信頼とは相反するような行為を何度も繰り返しています。75歳とは言え、神様への信頼に関しては未熟だったのです。35年間の旅路は失敗やそれに伴う試練を繰り返しながら成長していくためにあったと言えます。

22章に戻り、1節と2節です。

22:1 これらのことの後で、神はアブラハムを試された。神が、「アブラハムよ」と呼びかけ、彼が、「はい」と答えると、

22:2 神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」

これらのやりとりから、神様とアブラハムとの間に親密とも言える関係が築き上げられているのが読み取れます。「アブラハム」。直ぐに「はい」と応じる声。私達が残酷かつあり得ない命令として読んでいる2節ですが、そこにはアブラハムの深い思いを理解しておられる神様ならではののみ言葉も同居しているのです。「あなたの息子」「あなたが愛する息

子」「あなたのたった一人の息子イサク」。ああ、可愛そうなアブラハム！鉛のような重苦しさに耐えながら、彼の心は悩み苦しみで一杯になります。

■従う それでもアブラハムは、朝早く起き出して、出かける準備を始める。身支度をし、ろばに鞍を置く。二人の若者に着いてくるように告げ、そして我が子イサクにも出発を告げる。新共同訳は、語順を変えて訳してしまっていますが、原文や新改訳を読むと、アブラハムが薪を割ったのはそれらの準備の一番最後であったことがわかります。外見はひたすらみ言葉に従っているだけのように見えて、心の中では「えいっ」「えいっ」と、やっとの思いで身体を動かしているような状態だったのです。

「行きなさい」と神様が示された地、モリヤの地までは、二泊三日かけて歩く必要がありました。アブラハムにとってはそれこそ重い足取りであったに違いありません。夜になり、夕食をとり、休息している間、彼らはどんな会話を交わしたのでしょうか？5節や7節を読むと、二人の若者にもイサク本人にも、アブラハムは心中の葛藤を打ち明けていなかったことがわかります。何という孤独な旅。3人の連れがいながら、彼は三日の間、ひとり苦しみ続けるのです。

とうとう神様が示されたその山、その地点に到着してしまいました。アブラハムは、既に意を決してしまったかのようです。祭壇を築きました。運んできた薪をその上に並べました。イサクを縄で縛りました。勿論、既にイサクは気付いていたはずですが、父は自分を献げものにする気であるということ。イサクがどう反応したのか、抵抗したのか、それともおとなしく従ったのか、聖書は何も語っていません。恐らくここに書かれている事以上の事柄と、時間の経過があったのだと思います。しかし、最後です。イサクを祭壇の薪の上に載せました。それで最後。あと残されている行動は一つだけ。アブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、イサクののど元へ走らせようとします。

「アブラハム、アブラハム」。刃物の動きが止まります。「はい」と答えたアブラハム。その瞬間、彼は解放されたのです。天から響く御使いの声が続きます。12節です。

22:12 御使いは言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」

そして13節にあるとおり、アブラハムはすぐそばで一匹の雄羊が動けなくなっているのを見つけ、それを焼き尽くす献げものとして献げます。

■テスト 事の顛末を一通り見届けたところで、先に挙げていた疑問に戻しましょう。人間を生け贄として要求するはずがない聖書の神様が、何故そのような命令をアブラハムにはなされたのか？という疑問です。三つに分けてお答えしたいと思います。まず第一、「神はアブラハムを試された」です。新改訳は「試練に合わせられた」と訳しています。

テストしたということです。どうしてそんなテストをする必要があったのでしょうか？ご自身に対するアブラハムの信頼を、神様は疑っておられたのでしょうか？疑いからではなく、ただその人の益のためになされるテストがあります。成長を促すためのテストです。そのテストは優しい問題から、難しい問題へと、段階を追って施されます。22章でアブラハムが受けたテストは、神様が人間に与えられる最も難度が高いテストです。35年間神様と共に旅を続けたアブラハムだからこそ、受けるべきであると神様が判断されたテスト。それは彼を極限にまで追い込みました。アブラハムは、テストを通して神様に対する信頼を極限にまで働かせることを学びました。彼が25節で連れてきた若者達に告げた言葉、

22:5 (アブラハムは若者に言った。)「お前たちは、ろばと一緒にここで待っていてなさい。わたしと息子はあそこへ行って、礼拝をして、また戻ってくる。」

には、そんな彼の最大限の信頼が表れています。神様は、私の子孫が星の数ほどになるとはっきり約束して下さった。誠実な神様がその約束を違えられるはずはない。だから、たとえ今回の命令に私が従ったとしても、必ず神様は、この一人息子を私に返して下さる、という信頼です。

■絶対がない 第二に、真の神が人間の生け贄を要求されることはどんな状況にあっても絶対がないということ、アブラハムが受けたこの試練を通して聖書が明確にしているということです。現代でこそ、人身御供は絶対に禁止されるべきなのが当たり前となっていますが、人間の歴史全体を見渡せば、当たり前ではありませんでした。アブラハムが生きていた時代、彼を取り巻く古代中近東社会においても、様々な人身御供が行われていたことがわかっています。そういう文化だったのです。アブラハムも、もともとはそんな文化に囲まれて生まれ育った人間でありました。何よりも自分が信じる神が大事。だから神が要求されるならば、最も愛する家族でさえ献げなければならないのではないか…？そんな考えに揺さぶられていたのかも知れません。ありません。神様がそんな要求をされることは絶対にありません。アブラハムはテストを通してそれをはっきりと学びました。私達人類は、アブラハムをとおしてその事を学びました。もうテストは必要ありません。それは私達の信仰の父、アブラハムだけが受けるべきテストであったのです。

■主の山に備えあり 何故そのような命令を神様はアブラハムになさったのか、その答えの第三です。今日のテーマは「主の山に備えあり」、その備えとは献げもののことであると、説教の冒頭で申し上げました。もう一度、22章2節をご覧ください。

22:2 神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物

としてささげなさい。」

モリヤの地とは、今のエルサレムがある地方、神様が命じられた山とは、後に神殿が建てられるシオンの山のことであることが、聖書の別の箇所、第二歴代誌3章1節からわかります。アブラハムがわが息子イサクを神様に献げようとして築いた祭壇、それが後のイスラエル民族による神殿祭儀の原型です。アブラハムはその場所で焼き尽くす献げものを献げました。それは愛する息子の身代わりとして神様が用意して下さった雄羊でありました。ここに献げものの本当の意味が示されています。どういうことでしょうか？聖書が私達に教える献げものとは、人間の側が犠牲を払って神様をなだめ喜ばせるために行うものではありません。献げものは、神様が全て備えて下さるもの、神様の方が犠牲を払って下さることによって、初めて成り立つものなのです。献げものとは恵みです。神様からの一方的な恵みです。それが、他の宗教において献げられる動物の犠牲と、聖書が教える献げもの、イスラエルの民がエルサレム神殿において日々献げ続けた動物の献げものとの決定的な違いです。

主の山に備えあり。主が備えて下さった献げものによって、アブラハムは更なる祝福を得ました。イサクは命を得て、アブラハムに与えられた祝福の約束を受け継ぐものとなりました。イスラエルの民は、神殿で日々献げ続けました。主の山に備えあり。神様が、備えて下さったのは彼らのための献げものだけではありません。私達のためにも備えて下さいました。どこに？主の山シオンに。どんな献げものを？イエス・キリスト、神様が心から愛される独り子をです。何故あのような命令を神様はアブラハムになさったのか？そこまでして神様は私達を愛しおられる。神様は私達を救い出すために、ご自身さえをも犠牲にされるお方。徹底的な愛のお方であることを示されるためであります。それが最終的な答えです。

お祈りしましょう。